

■はじめに

「年年歳歳 花相似たり 歳歳年年 人同じからず」

毎年この時期を迎えると、この言葉が思い浮かびます。人事異動により新しい体制が始まりました。今年度も皆さんと一緒に頑張っていきたいと思います。



■百年の計

皆さんは次のような言葉を聞いたことがあるでしょうか。23 年前、慶應義塾大学初代総合政策部長 加藤寛教授が卒業生に、はなむけの言葉として次の言葉を贈りました。

1年の計を立てるならば、種を蒔けばよい。
10年の計を立てるならば、木を植えればよい。
しかし、百年の計(はかりごと)をするならば、人を育てるしかない。

この言葉の中にある「人を育てる」という営みとは、私たちが行っている日々の教育です。では、私たちは何のために教育を行っているのでしょうか。教育の目的とは何なのでしょう。

一言で言えば、「幸せに生きるため」です。しかし、私たちは一人で生きているわけではありません。人と関わり合い、大勢の人の中で社会の形成者として生きています。自分が幸せに生きるためには、同時により良い社会を創る必要があります。こう考えると、私たちはこれからの社会を創っていくことができる子どもを育てなければならぬのです。「百年の計」とは、そんな思いが込められている言葉だと私は思っています。

■ミネルヴァの梟

上の言葉を語られた後、加藤教授は、近代ドイツ哲学者ヘーゲル著『法の哲学』の序文の一節「ミネルヴァの梟は迫りくる黄昏に飛び立つ」という言葉も引用して卒業生へエールを贈りました。ミネルヴァとは、ギリシャ神話の文武・知恵を司る女神です。そのミネルヴァの使いである梟は知性の象徴とされています。一つの時代が終焉を迎え、古い体制や考え方が通用しなくなった時を黄昏に、古い体制の束縛から解放され、新しい時代、新しい知恵を求めて時代を切り開いていく者を梟に喩えたのでしょう。加藤教授が語られた1994年当時も、バブル経済がはじける等まさに先の見えない時代でした。だからこそ、教え子たちを「ミネルヴァの梟」になぞらえ、世界の暗闇を切り拓いてほしいと激励したのです。私は加藤教授への大きな共感と共に、奈良市の子どもたちにもそれぞれが得意な世界へ「ミネルヴァの梟」となって時代を切り拓いてほしいと願っています。

■世の中を照らしていける人材

私が「ミネルヴァの梟」としてイメージしている人物に、山口絵理子さんという方がいます。彼女は大学時代、インターンで途上国援助の仕事に携わりました。しかし、途上国

の現場に行ったこともない人たちが援助政策を考えることに矛盾を感じ、自らの目で現実を見るため、アジア最貧国であるバングラデシュに行く事を決意しました。2週間の滞在で各地を見て回り、さらに深くバングラデシュを知るため現地の大学で学ぶ中で、特産品のジュートに出会いました。バングラデシュが誇るジュートを使って、日本人が買いた



くなるような最高品質のバッグをつくれれば、援助や寄附でなく、健全で持続可能な経済基盤の提供という形で貧困の解消ができると考え、山口さんは、「株式会社マザーハウス」を設立しました。幾多の困難にあいながらも、彼女を突き動かしたのは「途上国から世界に通用するブランドをつくる」という理念です。山口さんは、「途上国支援は継続させて初めて意味がある。なめられても裏切られても、絶対に継続させる強い志がないならやめておいたほうがいい。」そして、「本当のことが知りたいなら、客観的な情報ではなく、現場に身を置いて自分で感じた主観を信じること。それを哲学や理念へ育てていく事ができて初めて、皆に納得してもらえるビジネスになる。」というようなことを語っておられました。様々な困難にあいながらも、自分の理念を貫き、やり抜いていく。まずは、やってみる。そこが彼女の素晴らしいところだと思います。従来の支援活動に疑問を持ち、自らバングラデシュの中に身を置き、現地の大学院で学ぶ。これは、真っ暗闇の世界に自分の行く道を探して飛び立っていく鳥の姿と重なります。

■ミネルヴァの梟を育てる

一つの時代が終わる黄昏の時、女神ミネルヴァは梟を飛ばし、その時代がどのような世界だったのか梟に総括させました。梟はミネルヴァに仕えて世界中の知識を集めます。一つの時代が終焉を迎え、古い知恵が黄昏を迎えたとき、新しい智恵を開くために一斉に飛び立ち、世界の暗闇を照らしていくのです。これが学問の発祥といわれています。ギリシャ・アテネは学問発祥の地なのです。

時代の節目には「ミネルヴァの梟」となりうる人材が必要です。第4次産業革命と言われている時代の入り口に立っている今、我々が過ごしてきた50年、60年とは比べ物にならないスピードでこれからの社会は進んでいきます。そのような時代に必要となるのが、高い志や理念をもつ自立した人間として、困難にへこたれず、他者を巻き込み、協働しながら新しい価値を創造する力です。子どもたちが、様々な人と関わりながら学び、その学びを通じて、自分の存在が認められることや自分の活動によって何かを変えたり、社会をよりよくなりましたりできることなどの実感を持つような取組を多く行うことが、「ミネルヴァの梟」を育てることに繋がるのではないのでしょうか。



■おわりに

今回年度の最初ということで、理念的な話をしました。これを学校、地域、保護者と共有し、教育を進めてください。子どもたちに対しても、発達年齢に応じて噛み砕いて話をすれば理解できる内容です。校長先生方が自身の言葉で語っていただくことが重要ですので、宜しくお願いします。